

第9章

ミャンマーの綿花生産政策と栽培農民

高橋 昭雄（東京大学東洋文化研究所）

はじめに

米、豆類、サトウキビとともに、ワタはミャンマー(ビルマ)の四大主要農作物のうちのひとつを構成する。この4つを含む主要な作物は、社会主義の時代すなわち1962年から1988年まで厳密な供出システムの下にあった。88年以降の市場経済化の中で、全農作物作付面積合計の40パーセント以上を占める(Table 1参照)米および豆類の供出制度が緩和された一方、国有の産業は供出から利益を上げなければならないので、ワタとサトウキビは厳格な国家管理の下に置かれた。

Table 1. Sown Acreage of Selected Crops

(In Thousand)

Crop	1985-86		1990-91		1992-93		1993-94		1994-95		1995-96		1996-97		1997-98		1998-99		1999-2000	
	Acre	%	Acre	%																
Paddy	12114	47.2	12220	48.8	12684	46.6	14021	49.8	14643	48.8	15166	47.6	14518	47.7	14294	47.1	14230	43.3	15528	42.4
Sugarcane	151	0.6	118	0.5	187	0.7	154	0.5	130	0.4	165	0.5	204	0.7	266	0.9	311	0.9	333	0.9
Cotton	532	2.1	387	1.5	416	1.5	355	1.3	505	1.7	937	2.9	824	2.7	659	2.2	804	2.4	842	2.3
Jute	151	0.6	92	0.4	137	0.5	82	0.3	97	0.3	124	0.4	116	0.4	94	0.3	100	0.3	95	0.3
Rubber	190	0.7	191	0.8	193	0.7	205	0.7	220	0.7	259	0.8	294	1.0	333	1.1	369	1.1	419	1.1
Gross Area	25662	100	25024	100	27200	100	28134	100	30005	100	31837	100	30422	100	30336	100	32882	100	36582	100

特にワタの作付面積は1994-95年以来著しく増加しており、1994-95年以前には2パーセント未満だったものが、1999-2000年にはすべての農作物の作付面積の合計の2.3パーセントを占めるに至った。自給と輸出のための生産、購入、加工および流通をコントロールすることによって、国家は、この急速な増加に重要な役割を果たした。現在、2社の国有企業が深く綿業に関係している。そのひとつは農業灌漑省の下にある。ミャンマー綿花・養蚕公社 (Myanma Cotton and Sericulture Enterprise、略称 MCSE)である。またもうひとつは第一工業省によって管理されたミャンマー織物公社 (Myanma Textile Enterprise、略称 MTE)である。前者は綿花栽培の普及とその買い上げおよび挑発した実綿¹の縫縫を行い、後者は紡織と染色を分担している。

MTEの工場の経済分析を行なう情報を十分に集めることができなかつたので、この論文は主としてMCSEの農家レベルでの生産および買い上げの活動とそれに対する綿花栽培

農家の対応を扱う。

ワタの耕作は紀元後の早い時期から 9 世紀初頭まで続いたといわれるピュ一人の王朝時代にすでに始まっていたと言われており、19 世紀末に至る王朝時代を通じて、最も重要な輸出商品のうちの 1 つであった。綿作の中心地である上ミャンマーから馬とロバによって、主要な輸出仕向先である雲南に運ばれた。17 世紀の後半、ミャンマーに到着したオランダの商人はこのミャンマー雲南ルートを独占しようとした。しかし、ミャンマー人のタウングー王朝（1531~1752 年）はそれらを専有し、その管理の下でルートを維持した。オランダに遅れてやってきた英國とフランスの商人たちもこのルートを巡って争ったが、結局、コンバウン時代（1752~1885 年）後半には英國人がこの商売を支配した。1852 年、第二次英緬戦争の結果下ミャンマーがイギリスに領有されると、綿輸出からの収入は王朝にとって非常に重要な財源となった。しかし、ビルマ全体が 1886 年に英國の占有に落ちて以降、綿業は、英國、インドおよび日本からの綿織物の輸入により凋落の一途をたどり、綿作も激減していった。だが、1900 年代初頭、ミャンマーの伝統に帰ろうというウンターヌ運動の一環として、綿生産が復活した。1909-10 年には約 200,000 エーカーだった綿の作付面積は 1919-20 年には 400,000 エーカー以上にまで増加した。また、1948 年の独立後は、綿生産の拡張は、政府の重要な農業政策のうちの 1 つを構成した。ところで、王朝時代からこのころまで、ミャンマーで栽培可能なワタは、ミャンマー語でワージー (wagyi) と呼ばれる、太くて短いわゆる短纖維品種のみだった。アメリカやエジプトのワタに代表される細くて長い長纖維種 (long staple cotton) がミャンマーに紹介されたのは、ネーヴィンのクーデタによって成立したビルマ式社会主義政権（1962~1988 年）成立直後の 1963 年のことであった。社会主義軍事政権は、良質な種子、化学肥料、殺菌剤、殺虫剤、噴霧器および技術的なガイダンスを提供することにより、長纖維種綿生産を促進した。社会主義を標榜する国家の強力な指導によってはじまりかつ推進されたこのワタ生産は、市場経済制度が導入された 1988 年以降も、そのシステムはほとんど変わることなく続いている。

本論文の目的は、次の 3 つである。まず第 1 に、綿作に関する国家の生産促進政策および供出政策を詳細に検討する。これによって、農民が適切な作物を選び、自然環境や社会経済状況に適合的なクロッピングパターンを採用する選択権を持っているかどうかを評価することができるであろう。第 2 に、ワタおよびこれと競合する作物のクロッピングパターンを考慮しつつ、綿作の生産費および余剰を測定し、これと代替する作物のものと対比する。これによって、国家によって強力に指導管理されている小農たちに綿作が、この強制によってどのようなディストーションを被っているかが明らかになるであろう。また、強制作付、強制買い上げ制度のために農民たちが遭遇せざるを得ない具体的な問題点についても記述されるであろう。そして第 3 に MCSE が原綿をさらに下流に売り渡す場合の諸問題を検討する。具体的には、MCSE が MTE へ原綿を供給するときに MTE 側が遭遇する問題点を、MTE の工場長とのインタビューから集められた情報に基づいて記述し、

さらに綿花の世界市場を概観して、ミャンマーにおける原綿の輸出および輸入に関わる諸条件を考えてみる。

以上の考察を踏まえての結論は、国有企業がこのまま農民を支配・管理していくのかあるいは民営化に向けて進んでいくべきなのだろうかをいうオルタナティヴ含むことになるであろう。

第1節 国家の綿生産促進政策

ミャンマー綿花・養蚕公社(MCSE)は、1994年5月に農業灌漑省傘下の国有企業のひとつとなって以来、綿生産の普及および買い上げに責任を負ってきた²。

その主な事業内容は以下のようなものである。

MCSE は農民に良質の種子を供給する。公社によって買い上げられた実棉は、MCSE が所有、運営する綿織工場で加工され、生産された原綿は主に MTE に公定価格で売り渡されるが、一部は民間に売却されたり輸出に回されたりする。そして後に残った種子が選別されて安い価格で綿農民に販売されるのである。また MCSE はその管理下に実験農場を持ち、そこでは収量と品質面で優った種子の開発が行われている。

MCSE は、ミャンマー農業開発銀行(Myanma Agricultural Development Bank)によって提供される、1エーカー当たりの棉花作付につき 2,500 チャット³の農業ローンに加えて、播種の 1か月後に、1エーカー当たり 5,000 kyats の実棉代の前払いを行う。さらに MCSE は民間の商人よりわずかに安い価格で綿農民に化学肥料および農薬を供給する。だが、そのような形式での綿農民への財政的援助は、特別に指定された強化ゾーンに限られており、また MSCE の予算上の制約のために、そのようなゾーンでさえ、初期の計画をカバーするのに不十分である。

MCSE の生産促進政策で最も重要な活動は技術的な助言および援助である。ワタの生産、特に長纖維種は非常に難しいので、農民は MCSE の普及員による適切な指導、すなわち殺菌剤をスプレーする時期、投与肥料の量などに関する特定の指示がなければ生産を最適化することができない(と、いわれている)。

こうした MCSE が提供するさまざまな援助の見返りとして、綿作農民は民間商人に売るよりも安い価格で MCSE に綿を供出しなければならない。2001/02 年度の実綿の供出価格は、ゴミや黄変した部分を取り除いてクリーニングされた綿が 1 ヴィス(約 1.6 キログラム)あたり 180 チャット、クリーニングされていないものが 110 チャットだった。これは民間の価格よりかなり安いので、MCSE は競争力を維持するために、民間商人が実綿や原綿を購入したり、輸送したり、加工したりすることを許可する権限を与えられている。

すなわち、MCSE の許可なしには民間の商人や加工業者の活動は不可能なわけであるか

ら、このような場合農民は MCSE にしか実綿を売ることができないことになる。MCSE は毎年適切な時期に適切な量の買い付けおよび輸送の権利を民間業者に与えてきたが、国営企業の需要増を理由に 2001/02 年度からはこれを行っていない。つまり農民は生産したワタの全量を低価格で MCSE に供出しなければならなくなつたのである。もし農民が民間業者にワタを売った場合、買った商人は法律⁴によって逮捕されるが、売った側の農民はそのようなことにはならない。こうして国家は「違法な」取引を禁じ、農民の生産と販売行動を管理することができる。そしてこれを取り締まることが MCSE 職員の重要な任務のひとつとなっている。

農民にワタの作付を割り当てるのも MSCE の重要な仕事であるが、これは MCSE 単独で行うのではなく、綿作が行われる各郡(township)の平和開発評議会⁵の指導の下、農業公社、灌漑局、警察などが調整を行って、各村レベルに降ろしていく。すべての農地は国家が所有し、農民は耕作権のみを与えられる⁶、とされているので、建前上、各農民は綿作の命令を拒否することはできず、もし拒否すれば当該農地は綿作を受け入れる者に耕作権が渡ることになる。ただし、作付強制を拒否した事例は調査の過程では確認できなかった。

Table 2. Cotton Production in Myanmar

Crop	Classi-fication	Unit	(In Thousand)											
			1985-86	1990-91	1992-93	1993-94	1994-95	1995-96	1996-97	1997-98	1998-99	1999-00	2000-01	2001-02 (target)
<i>Cotton (wagy)</i>	Sown	Acre	143	108	109	95	101	124	103	86	84	104	110	100
	Harvested	Acre	135	104	104	86	97	119	101	85	83	103	100	
	Production	Ton	21.5	15.9	14.7	11.3	12.9	16.8	14.9	12.7	12.4	14.8	14.8	
	Productivity	Kg/Acre	0.159	0.153	0.141	0.131	0.133	0.141	0.148	0.149	0.149	0.144	0.148	
	Procurement	Ton					2.8	3.5	5.0	2.0	1.5	3.2	4.04	3.4
	Procurement Ratio(%)						21.6	20.8	33.9	15.7	11.9	21.4		27.3
<i>Cotton (Mahlaing5/6)</i>	Sown	Acre	246	203	212	184	200	175	138	61	83	111	116	85
	Harvested	Acre	234	189	201	151	183	140	128	59	75	106	111	
	Production	Ton	38.2	27.7	24.8	12.7	22.7	16.8	14.6	6.9	8.1	12.2	13.1	
	Productivity	Kg/Acre	0.163	0.147	0.123	0.084	0.124	0.120	0.114	0.117	0.108	0.115	0.118	
	Procurement	Ton					3.9	4.4	1.6	0.3	0.8	3.8	1.5	2.9
	Procurement Ratio(%)						17.1	26.3	10.9	4.5	9.6	30.9		11.8
<i>Cotton (long staple)</i>	Sown	Acre	143	76	95	76	204	638	583	512	637	627	576	680
	Harvested	Acre	127	64	85	65	159	542	508	464	558	587	542	
	Production	Ton	38.5	17.7	27.6	18.2	49.2	128.8	135.8	141.5	135.1	148.6	152.9	
	Productivity	Kg/Acre	0.303	0.277	0.325	0.280	0.309	0.238	0.267	0.305	0.242	0.253	0.282	
	Procurement	Ton					13.7	25.9	23.2	23.9	22.1	17.0	15.4	54.9
	Procurement Ratio(%)						27.8	20.1	17.1	16.9	16.4	11.4		10.1
Total	Sown	Acre	532	387	416	355	505	937	824	659	804	842	802	
	Harvested	Acre	496	357	390	302	439	801	737	608	716	796	753	
	Production	Ton	98.2	61.3	67.1	42.2	84.8	162.4	165.3	161.1	155.6	175.6	180.8	
	Productivity	Kg/Acre	0.626	0.576	0.589	0.496	0.566	0.499	0.529	0.571	0.500	0.512	0.548	
	Procurement	Ton					20.3	33.8	29.8	26.2	24.4	23.9	21.0	61.2
	Procurement Ratio(%)						27.8	20.1	17.1	16.9	16.4	11.4		10.1

Source: Central Statistical Organization, *Statistical Yearbook 2000* (Until 1998-99)
Myanma Cotton and Sericulture Enterprise, *Internal Documents* (1999-2000 & 2000-01)

第2節 調査地および調査方法

ミャンマーには2つの対照的な季節がある。すなわち乾期と雨期である。乾期は10月中旬から5月中旬にかけてであり、残りの季節は雨期である。さらに乾期は冬と夏の2つのカテゴリーに分類される。すなわち乾期には、12月から2月までの寒い季節とその後に来る暑い季節がある。よって毎年の降水量は降雨によって決定されることになるが、その量は地理的位置に依存して、大きく変化する。例えば、ミャンマー中部にあるドライゾーン⁷と呼ばれる地域の年間降水量は、デルタ地帯の2500-3000ミリメートルに比べて、わずか600ミリメートルから900ミリメートルと、東京よりずっと少ない。主要なワタ生産地域はこのドライゾーンに広がっている。そして、いくつかの重要なワタ生産地域が綿作農民の現在の経済状態を研究する目的で選択された。

Table 3 の中で示されているように、タイエッ (Thayet) 県が作付面積ではトップで、マグエー (Magwe) 県が第2位、第3位ミンジャン (Myingyan) 県、第4位チャウセー (Kyaukse) 県、第5位ミンブー (Minbu) 県の順になっている。一方生産量においては、マグエー県が1位、そしてチャウセー県、タイエッ県ミンブー県およびモンユワー (Monywa) 県がこの順で続いている。これらの主要なワタ生産地域の中から、作付面積でも生産量でもランクインしているチャウセー県、ミンブー県およびタイエッ県を実地調査として選定した。さらに詳細な分析については、チャウセー県のチャウセー郡内の3つの村、同ミッター (Myittha) 郡内の5つの村、ミンブー県サリン (Salin) 郡内の4つの村、およびタイエッ県アウンラン (Aunglan) 郡内の4つの村で調査を行った。アウンラン郡内の1カ村のみワージーを作付しているが、その他の村はすべて長纖維種のワタのみを栽培していた。

各郡のMCSE オフィスで、農業生産のアウトラインおよび普及事業、肥料や農薬の供給、供出政策の執行状況等に関する情報を得た後、各調査村を訪ねて、村長および数人の農民と会い、村の人口、農家世帯および非農家世帯の数や非農家の主な職業、労働力、村内の可耕地の面積、その分配、土地利用状況、牛および農具の所有、肥料や農薬の投入、農業金融、雇用関係、農産物販売、供出への対応等について、インタビューを行なった。

この概観的な調査の後に、さらに詳しい農家・非農家世帯の経済状況を知るために2つの村を選んだ。ひとつはミッター郡にあり、もうひとつはアウンラン郡にある。前者は灌漑された水田でワタを作るが、後者は天水畑でこれを栽培している。両村とも長纖維種のみを作付けている。これらの2つの村は、灌漑のある地域とない地域の間のワタ生産の比較のために選ばれた。農家世帯と同様に非農家世帯も含む40世帯を無作為抽出方法に選び、私自身がミャンマー語で各世帯を回ってインタビューを行なった。これらの調査はすべて2001年12月から2002年1月にかけて行われた。

Table 3. Cotton Production by Districts (2000-2001)

District	Sown (Acre)	Harvested (Acre)	Production (Ton)
Sagain	37174	36886	9637
Monywa	68025	35317	17115
Shwebo	19711	34345	11598
Mandalay	7988	7934	2125
Kyaukse	72598	72087	24034
Meiktila	69107	58836	8163
Myingyan	79085	73451	15825
Nyaung-U	2502	2166	326
Yametin	69233	63198	14306
Pakokku	52410	48481	11714
Magwe	92043	86917	24369
Minbu	71529	67760	19540
Thayet	102022	94185	21810
Gangaw	935	841	119
Pyi	23476	22126	4123
Thayarwady	5927	4605	949
Taunggoo	960	818	172

Source: Myanma Cotton and Sericulture Enterprise, Internal Documents

第3節 調査地域における綿作の概要

チャウセー郡は灌漑水田での水稻作で有名な地域である⁸が、綿作は天水畑で行われている。4月半ばにミャンマー暦の年越し行事であるティンジヤン(Thinggyan)と呼ばれる水祭りの直後に農民は畑を耕し、まもなく雨がやってくるとワタの種をまく。1963年に作計画がビルマ式社会主义政権によって導入されるまで、この地域でワタが栽培されたことはなく、豆、ソルガム、トマトおよびゴマといった畑作物が作られていた。調査村の中では 1 カ村が 1963 年に、他の 2 カ村は 1974 年にそれぞれワタ作を導入した。これによって農民の収入は飛躍的に増加し、彼らは綿作を他の作物に優先させることになったという。しかし天水に依存する耕作は、天候の変動に大きく左右され、また農民農業が国家の経済システムに巻き込まれことにより、国家の作付け計画や価格政策にも影響されることになった。他に有力な代替作物のないこの地域の農民は、国の実綿買い上げ価格が極端に低いと感じたとき、より高い収入を得るために、これを民間業者に売ってしまうこともあった。このような場合、国家は上述のように「違法」な闇取引を商人を逮捕することによって取り締まるしかなかった。

長繊維種のワタは 1964 年にミッター郡にも導入された。同じ県内のチャウセー郡とほぼ同時期であるが、ミッター郡では、ワタは乾期に灌漑された水田で米のいわば裏作として栽培されることになった。この郡内のほとんどの土地は、10 世紀以上の歴史を持つ灌漑システムによって二期作を享受ことができる。農民は雨期には米やタマネギを植え、同じ水田に乾期にはワタ、トウガラシ、ゴマなどを栽培する。チャウセー郡の場合を異なり、ここにはワタに対する有力な競合作物があるので、実綿の買い上げ価格が低い場合、農民にはこれを闇に売るという選択以外に、より価格的に有利な作物を作る、あるいはそれが無理なときはそちらにより力を入れるという選択がありうる。事実、調査時のように実綿の供出価格が極端に低いとき、農民は綿作への肥料や労働力の投入を極力抑え、これらをトウガラシ、ゴマ、リョクトウといったより有利な作物に向けていた。水稻作についても同様のことが言える。國家の計画作物である米の供出価格がタマネギの市場価格よりも低い場合、農民は供出逃れや米からの作目変換または労働や肥料の投入量の増減を行うであろう。それらのうちいずれの手段を取るかは、ワタの場合も米の場合も、國家の出先機関の監視能力、違法行為を行った時の sankction の強度、農民と役人個人的関係等に依存することになる。さらに、何人かの農民は、MCSE から安い価格で購入した肥料を、ワタに投入せずにトウガラシに用いていた。このような行為まで MCSE の普及員がモニターすることは不可能である。もしこのような行為まで発見できるようにするとしたら、その監視コストは莫大なものになるであろう。

サリン郡でも、ワタはチャウセー郡と同じように天水畑で育てられる。しかし、前者は後者より作目に関してより多くの選択権を持っている。サリン郡ではワタに加えてトウガラシ、ヒヨコマメ、ヒマワリなどが雨期の間に栽培され、乾期にはゴマ、リョクトウ、キマメなどが作られている。このことは一見同じ畑に年に 2 回作物が作付されているように思われるが、実際には水の制約により、各耕地についていえば 1 年 1 作しかできない。したがって作物価格およびその栽培からの利潤は、作目の選択に重要な役割を果たし、また期待したほど利益にならない作物は、次の作付期にはより利潤の高い作物に取って替わられる。もしこのような農民経済行動を国家のワタ作付計画が妨げるならば、農民にワタを作付けさせるにしても、農民がそのワタを政府に安価に売り渡させるにしても、かなりの公務員この強制や監視のために割かねばならないであろう。2001 年 12 月のこの地域での出来事は、そんな事例のひとつであった。この月、闇市場の実綿価格は、クリーニングされていようがいまいが、1 ヴィスあたり 350 チャットだった。供出価格がクリーニング済み実綿 1 ヴィスあたり 180 チャット、非クリーニング実綿 110 チャットであるのは上述のように全国共通である。この価格差があまりに大きすぎると農民たちは考えたに違いない。この郡では多くの農民および仲買人が闇夜にまぎれて小さなボートを漕いでエーヤーワディ川を横切り、対岸のチャウッ (Chauk) 郡にある加工業者に実綿を売っていた。サリン郡のとある村の官製政治組織の長もしているひとりの有力者は、「自分はいつも闇価格で収

入を計算している。」と、私に語った。その後耳にした話によると、国家は多数の警察官、農業灌漑省および商業省の役人を動員して、何度も内偵を重ね、上記の闇加工業者を逮捕したという。

アウンラン郡でも、チャウセーやサリンの郡と同様に、ワタは雨期に天水のみに依存した畑で作られるが、耕作の方法は後二者とは異なる。アウンラン郡の綿作は、ワタの間にリョクトウ間作するのである。ここ数年リョクトウ価格が高騰しており、ワタの公定価格が異常に低く抑えられても、農民は収入を減らさずにワタを育てるか、少なくともワタによる経済的損害を最小限にすることが可能である。このことは、また、MCSE がワタの栽培を農民に強要することをほかの郡より容易にしている。農民は同じプロットにワタとリョクトウを同時に作付けるので、ミッター郡の農民のようにワタを差別することができない。

しかしリョクトウの生育期間はワタよりもはるかに短いので、何人かの農民はリョクトウを収穫した後のワタの世話を極力抑える。こうして価格的に魅力のないワタを早々に収穫した後、そこに再びリョクトウをまくのである。最近この郡内にあるひとつの村の一部の農民は、国の政策の下でサトウキビを植えなければならなくなり、その計画面積は毎年増加しているとのことである。サトウキビの生育期間は 10 ヶ月から 12 ヶ月であるので農民は裏作を行うことができず、またサトウキビは背が高いので間作や近作も不可能である。さらにサトウキビの生産価格はかなり高く、供出価格は異常に低い⁹。嵩が張るため闇取引も難しい。ワタに加えてこの村の農民にまた新たな重しが加わった。

第4節 農民の生産費分析および直面する問題

調査した郡の主なクロッピングパターンは、Table 4 の中で示されている。ワタはチャウセー群ではほとんど一年中耕地を占拠するが、他の郡では数か月の間のみである。さらに、チャウセー郡は、競合する作物も他の郡のものとは異なる。他のすべての郡は、トウガラシ、ヒマワリ、ヒヨコマメ、トウモロコシなどのような強い競争のある代替作物を持っているがチャウセー郡にはそれがない。ワタより有利な競合作物の存在は、国家のワタ作付け計画を敢えて欺いて他の競争的作物を作付けるのか、国家の流通規制や監視の目をくぐって実綿をやみルートに流すのか、といった選択を農民がするときに大きな影響力を持っている。

Table 4. Cropping Patterns in the Studied Areas

Township	Land	Crop	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar
Kyaukse	Ya	cotton		LP										
Myittha	Le	cotton										LP		
		summar paddy										LP		
		chili								LP,N				
		sesame										LP		
		monsoon paddy				LP,N								
		onion						LP,N						
Salin	Ya	sesame		LP										
		pigeon pea		LP										
		green gram		LP										
		cotton			LP									
		sunflower				LP								
		chili				LP,N								
		chick pea					LP							
Aunglan	Ya	green gram		LP										
		sesame		LP										
		green gram			LP									
		cotton				LP								
		sugarcane							LP					
		sweet corn				LP								
		pégyi					LP							
Aunglan	Le	paddy					LP,N							

note: LP: Land preparation, N: Nursery, = : Intercropping

source: Field survey conducted in Dec. 2001 and Jan. 2002.

Table 5 は調査した各郡のワタ作のエーカーあたり生産費と利潤を示す。殺菌剤を含む農薬のための費用はすべての村で非常に大きい。それは綿作の特徴のひとつである。農民は常にワタを注意深く観察し、必要な時に適切な農薬を散布しなければならない。MCSE の普及員は毎年これを強く指導しているという。綿作における虫害防除のための時間(それは Table の中で明示的に計算されない)は他のどの作物より長いかもしれない。さらに、当然ながら摘み取りが不可欠である。そしてそれには、何回も摘み取り労働者を雇う費用ばかりでなく、摘み取り適期に必要な労働力を確保しなければならないという困難が伴う。供出価格が 1 ヴィスあたり 70 チャット異なるので、多くの農民が MCSE への販売の前に彼らの実綿をクリーニングするようになり、それに伴うコストも新たに加わった。

Table 5. Per Acre Production Cost and Profit of Cotton

Cotton (Kyaukse)		Cotton (Myiththa)		Cotton (Salin)		Cotton + Green Gram (Aunlan)	
						Cotton	Green Gram
<i>Material input</i>		<i>Material input</i>		<i>Material input</i>		<i>Material input</i>	
seed	1,050	seed	480	seed	240	seed	200
fertilizer	5,500	fertilizer	2,750	fertilizer		fertilizer	13,500
pesticide	8,000	pesticide	5,000	pesticide	7,200	pesticide	7,200
<i>Cattle (including driver)</i>		<i>Cattle (including driver)</i>		<i>Cattle (including driver)</i>		<i>Cattle (including driver)</i>	
land preparation	3,900	land preparation	4,550	land preparation	5,500	land preparation	5,200
Inter Cultivation	650	Inter Cultivation	1,300	Inter Cultivation	2,000	Inter Cultivation	1,200
<i>Labor input</i>		<i>Labor input</i>		<i>Labor input</i>		<i>Labor input</i>	
sowing	300	sowing	520	sowing	500	sowing	700
thinning	500	thinning	390	thinning	1,000	thinning	
weeding	4,000	weeding	5,200	weeding	4,000	weeding	2,800
spraying	700	spraying	900	spraying	1,600	spraying	900
picking	3,500	picking	2,000	picking	4,000	picking	5,600
cleaning	3,000	cleaning	4,000	cleaning	1,500	cleaning	2,800
Total cost(purified)	31,100	Total cost(purified)	27,090	Total cost(purified)	27,540	Total cost(purified)	42,850
Total cost(non-purified)	28,100	Total cost(non-purified)	23,090	Total cost(non-purified)	26,040	Total cost(non-purified)	40,850
Gross income(purified)	54,000	Gross income(purified)	54,000	Gross income(purified)	36,000	Gross income(purified)	36,000
Gross income(non-purified)	33,000	Gross income(non-purified)	33,000	Gross income(non-purified)	22,000	Gross income(non-purified)	22,000
Profit(purified)	22,900	Profit(purified)	26,910	Profit(purified)	8,460	Profit(purified)	18,150
Profit(non-purified)	4,900	Profit(non-purified)	9,910	Profit(non-purified)	-4,040	Profit(non-purified)	6,150

source: Field survey conducted in Dec. 2001 and Jan. 2002.

チャウセー郡中の村では、すでに言及したように、綿作以外への作物転換が非常に困難である。農民ほとんどがワタ作による収入で暮らさなければならない。また非農民は、主としてワタ作のための雇用からの所得で生計を立てている。ところが、チャウセー郡の村の生産費分析は、ワタ生産のエーカーあたりの利潤が費用未満であることを示している。これは次のワタ作をするためにはいくらかの資金を外部から調達しなければならないことを意味し、農民がワタ作を続けるためには様々な補助金が非常に重要で不可欠であることを暗示している。国の援助が不十分な場合、農民は少なくとも次のワタ作のための経費を賄うために「不法な」販売をするかもしれない。

他の郡と異なり、ミッター郡の綿作は主として灌漑された水田で行われる。歴史的に古いがよく維持された灌漑システムによる適切な水供給により、この地域の綿生産はより多くまた他の地域より安定している。灌漑水路はさらに農民に恩恵を提供する。多くの農地で二期作が可能である。また作目の選択やクロッピングパターンに種々の変化をもたせることができる。しかし農民は、近年害虫と細菌類あるいは洪水による被害のために、ワタの生産性が減少したとこぼしている。また Table 5 からわかるように、ミッター郡のワタの生産費は、灌漑があるにもかかわらず、必ずしも他の地域よりも少ないわけではない。

そしてこの両方の現象、すなわち作物の多様性と減少するワタの生産性は関連づけられるよう見える。Table 6 の中で示されるように、ミッターではワタの主要な競合作物であるトウガラシ生産の利益が綿作からのそれより非常に大きい。よって農民は、厩肥、化学肥料、農薬および労働力をワタよりトウガラシにより多く傾注し、結果として、ワタの生産が疎かになり、病虫害が出ようが洪水になろうが、これを救う努力を節約してしまうのである。しかし、トウガラシ生産のコストは Table に見るようかなり高く、また国家からの資金を得ることは不可能なので、農民はすべての農地にトウガラシを植えるようなことはできず、一部分でワタ作を行い、残りにゴマを植える。ゴマ耕作からの利潤はトウ

Table 6. Per Acre Production Cost and Profit of Competitive Crops

(Unit: Kyat)										
(Myiththa)	chili	sesame	paddy	onion	(Salin)	sesame +pigeon pea	green gram	sun-flower	chili	chick pea
<i>Material input</i>					<i>Material input</i>					
seed	1,800	750	1,800	15,000	seed	300	300	2,625	1,500	1,000 5,000
fertilizer	7,000	2,000	9,500	5,000	fertilizer		2,125	4,450		4,000
pesticide	4,500			5,000	pesticide			3,500		3,000 2,800
<i>Cattle (including driver)</i>					<i>Cattle (including driver)</i>					
land preparation	3,900	3,250	4,550	5,200	land preparation	5,000	5,000	3,000	2,000	6,000
Inter Cultivation		650			Inter Cultivation	1,700	500		1,400	2,500
<i>Labor input</i>					<i>Labor input</i>					
sowing/planting	500	1,400	2,450	3,800	sowing/planting	400	400	100	1,100	280
thinning					thinning	400				
weeding	1,430	1,300		5,000	weeding	2,000	1,000		500	1,050
spraying	450			450	spraying		1,000			400
picking/harvesting	6,500	1,140	6,250	2,600	picking/harvesting	2,800	3,300	7,600	3,100	1,600
Total cost	26,080	10,490	24,550	42,050	Total cost	17,025	26,075	7,700	14,600	18,030
Gross income	220,000	48,000	58,680	375,000	Gross income	30,000	33,750	78,000	60,000	240,000 60,000
<i>Profit</i>	193,920	37,510	34,130	332,950	<i>Profit</i>		46,725	51,925	52,300	225,400 41,970
(Aunglan)	green gram	sesame	sweet corn +pegyi		Sugarcane	paddy				
<i>Material input</i>										
seed	2,000	750	800	1,000		6,500	1,500			
fertilizer	1,100	250		4,425			15,750	650		
pesticide	1,800	600		1,200			500			
<i>Cattle (including driver)</i>										
land preparation	2,000	2,000		3,200			5,600	8,000		
Inter Cultivation	800	800		800						
<i>Labor input</i>										
sowing/planting	140	140		490				2,080		
thinning	700	700		700						
weeding				1,400			280			
spraying	450	200		450			100			
picking/harvesting	5,000	2,275	1,700	1,680			7,500	2,940		
Total cost	13,990	7,715		17,845			36,230	15,170		
Gross income	44,800	25,000	50,000	25,900			39,750	31,680		
<i>Profit</i>	30,810	17,285		58,055			3,520	16,510		

note: Each bold type means competitive crop of cotton

source: Field survey conducted in Dec. 2001 and Jan. 2002.

ガラシより低いが、ゴマの生産費はトウガラシ半分未満で、利潤はワタよりも大きい。資金の少ない農民はこれを選択するであろう。また農民たちが投下できる労働力にはもちろん限りがあるので、多くの農民がワタ耕作のための労働を節約し、トウガラシまたはゴマにそれを向ける。また何人かの農民はワタ作のために安価に MCSE から供給された肥料をワタには一切用いずにトウガラシに施用する。実綿の供出価格とトウガラシの市場価格間の不均衡は非常に大きく、2000 年の作期のトウガラシ価格が 1 ティン（9 ガロン）あたり平均 2000 チャットであるのに対し、クリーニングされた実綿供出価格は前述のとおり 1 ヴィス 180 チャットである。両者の間の利潤ギャップが等しくなるには、トウガラシ価格 1 ティン 482 kyats に下落するか、あるいは、クリーニングされた実綿価格が 1 ヴィス 1105 kyats に上昇しなければならないだろう。これは実綿の現行供出価格を 6 倍以上に増

加させることを意味する、もしそれが不可能ならば、農民の福祉のためには実綿供出制度は廃止されるべきであろう。ほかの解決方法としては、中国へのトウガラシ輸出を自由化し、不足している外国収入の一助とするとともに、農民および商人の所得に適切な課税を課することが考えられるだろう。

同じ現象は雨季にも観察することができる。雨期米が供出対象作物になっており、これとタマネギが競合する。2001 年雨期のタマネギ作からの利潤は Table に見るよう米の 6 倍以上である。したがって農民には水稻作は自家飯米程度に抑えて、あとは利益の高いタマネギを作ろうとするインセンティヴが当然働くが、政府はこれを「指導」によって矯正しようとするのである。

サリン郡では、チャウセー郡と同様にワタは畑で作られるが、同郡と異なり、ヒマワリ、トウガラシおよびヒヨコマメといって競合作物が存在する。Table 5 に見るよう、サリン郡のワタ作利潤は他の 3 郡よりも低く最低である。これはチャウセーのような高いエーカーあたり生産費によるものではなく、粗放的な農法の結果としての低い生産性のためである。この地域では、生産費の少ない粗放的な農法が主流であるが、Table 6 との Table 7 の比較からわかるように、それでもワタの生産費が群を抜いて高い。つまり、ワタの競合作物はワタよりも生産費が安く、利潤はずっと大きいのである。この落差があまりにも大きいため、MCSE からのローン、代金前払いおよび技術的な援助にもかかわらず、農民たちはワタを作りたがらない。そしてこれを強いられた時、農民は実綿を闇ルートに売りさばくであろう。既述のエーヤーワディ川の小船がその好例である。

ワタは、郡でも畑作物のうちのひとつを構成するが、上に言及された他の郡とは異なり、リョクトウが間作される。この間作システムは、農業公社 (MAS) と MCSE によって非常に微細に設計されている。アウンランは間作のモデル郡となっている。このシステムにより、MCSE は農民に対してより強力にワタ作を指導し、一方農民は市場性のある農作物生産を享受することができる。一見すると、他の調査地域とは対照的に、農民は喜んで供出用のワタ作を行っているように見える。しかし Table 5 は、ワタとリョクトウの間作の利潤が、高いコストにもかかわらず、チャウセー郡やミッター郡のワタ作よりも低いことを示している。近年のリョクトウ市場価格の高騰は、綿耕作による損害をある程度償った。しかし将来の安定した高値あるいはさらなる増加は不確かである。事実思慮深い農民はそのような状況に気づいている。一部の農民はワタ作からの撤退を図り、またあるものは作付けパターンを変えようとしている。すなわち、リョクトウのみの栽培を年に 2 回行う方法に切り換えたり、食用トウモロコシをフジマメ (lablab bean) との間作等を試みたりしている。もしワタとの間作ではなくリョクトウのみの単作にしたら全費用は半減し、利潤は 2 倍になるだろう。一方、Table 5 で示されるように、食用トウモロコシとフジマメおよびの間作の利潤は、ワタとリョクトウの間作の利潤のほぼ 3 倍である。

さらに、国家によるサトウキビ作付計画の導入は、アウンラン郡の農民をより困難な状

況に陥れている。Table 6 の中で明白に例証されるように、サトウキビの生産費は他の作物のどれよりも非常に高い一方で、利潤は、低供出価格のために、非常に低い。さらに、サトウキビは一年中農地を占拠するので、農民は他の作物を作つて低い収入を補うことができない。

第5節 ミッター郡の事例研究

より詳細な観察のためにミッター郡サレー（仮名）で世帯調査を行った。村の PDC 議長によると、サレー村には 39 の農家世帯および 51 の非農家世帯を含む 90 世帯が居住していた。しかし、非農家に分類された 51 世帯のうち 10 世帯が、猫の額ほどの小さな土地を耕作していた。したがって、49 世帯が自ら耕作権を保有するか、あるいはその権利を借りるかして農地を自ら耕作する、いわゆる農家であった。この 90 世帯のうち 40 世帯を無作為抽出してインタビュー調査を行った。

この 40 世帯には、29 の農家世帯および 11 の非農家世帯が含まれていた。5 世帯の農家が耕作権保有せず、他のものからこれを借りる、いわば小作農であった。その一方で 3 世帯の農家が、農地の一部つまりその耕作権一を貸し出していた。そして残りの 21 世帯の農家が、自らの耕作権保有地を自ら耕作していた。29 の農家世帯の平均経営面積は灌漑田の 5.13 エーカー、畑地 0.51 エーカーの計 5.64 エーカーである。農地分配に関しては、灌漑田と畑地を合計した経営面積のジニ（Gini）係数を計算した。調査した 40 世帯すべてを対象としたジニ係数は 0.58 で、農家のみの場合は 0.43 だった。

前者は、私が 1990 年代に経済調査を行った 7 つのミャンマーの農村のいずれよりも低く後者はより高い¹⁰。サンプル中に占める農家の比率が、村全体のそれよりもかなり大きいため、前者の係数は、村の全世帯を対象とした場合のジニ係数より低くなる可能性が高い。しかし後者の係数は実態に近いかもしれない。

灌漑の恩恵をこうむって、水田においても畑地においても二毛作が行われている。ただし水田にはそのまま水路灌漑を利用できるが、畑地では水路から水を上げるためのポンプが不可欠である。しかし作物強度(crop intensity)どちらの農地でも完全な二毛作を表す「2」ではなく、水田では 1.49、畑地では 1.46 である。その理由は、雨期には水田の一部が水没してしまい、乾期には水不足のため畑地の一部を耕作することができないからである。

Table 7 は、まず各世帯の作付総面積（経営面積）に占める各作物の作付面積の構成比を計算し、任意の 2 つの比率間の偏相関係数を示したマトリックスである。同マトリックスは、ワタ、ゴマ、乾期米およびトウガラシの乾期作物 4 種の間、雨期米とタマネギの作付の間に負の相関性があることを示す。もちろんそれは、これらの作物中に高い競合的、

代替的関係があることを意味する。農民が 1 エーカーあたりもの利潤を最大化したければ、Table 5 および 6 中で示されているように、雨期にはタマネギを、乾期にはトウガラシを植える可能性が高い。

しかし、主として政府の強制的農産物作付計画のために、従として水没、水不足、資金不足、土地の不適合等のためにそれを行うことができない。

Table 7. Partial correlation matrix of ratios of sown acreage to operational acreage by crops

	Cotton	S. Paddy	Sesame	Chili	M. Paddy	Onion	Others
Cotton	1.00						
S. Paddy	-0.59	1.00					
Sesame	-0.52	-0.56	1.00				
Chili	-0.60	-0.66	-0.57	1.00			
M. Paddy	0.44	0.32	0.42	0.13	1.00		
Onion	0.25	0.21	0.31	0.26	-0.59	1.00	
Others	0.01	0.10	0.10	-0.05	-0.60	-0.61	1.00

Note: Block type significant at 1 % level of significance

Italic type significant at 5 % level of significance

Source: Field survey conducted in Dec. 2001 and Jan. 2002.

ワタ作に関して言うと、Table 8 に見るように、トウガラシ生産からのより高い利潤にもかかわらず、乾期には水田面積の 17 パーセントでワタが作られている。しかし、国から県、郡を通してこの村に降りてきた生産計画によると、村の水田の 30 パーセント以上にワタが作付されなければならないことになっている。この事実は、農民は耕作権を国から与えられる見返りにトウガラシからの高収益を一部犠牲にして綿生産プログラムに従う一方、それに完全には屈服しない様子を示している。国家の作付計画は草の根まで実行されてはいるが、それらの施行および実行は完全ではないのである。

ちなみに、経営面積に占める各作物の作付面積の構成比は、Table 7 および 8 に示されているように、経営規模に対して中立である。

Table 8. Farm household numbers by farm size groups and ratios of sown acreage to operational acreage by crops

Operational Acreage	No. of Farm Household	ratio of sown acreage to operational acreage by crops						
		Cotton	S. Paddy	Sesame	Chili	M. Paddy	Onion	Others
less than 4	13	0.15	0.15	0.15	0.44	0.34	0.25	0.32
4-8	7	0.11	0.20	0.19	0.25	0.39	0.22	0.53
8-12	6	0.26	0.22	0.20	0.27	0.50	0.40	0.13
12-16	3	0.13	0.10	0.11	0.23	0.26	0.22	0.47
total	29	0.17	0.17	0.16	0.28	0.39	0.28	0.35

Source: Field survey conducted in Dec. 2001 and Jan. 2002.

第6節 MCSE から MTE への原綿販売

農民から収集した実綿を綿織した後、MCSE は、生産した原綿の大部分を公定された価格で MTE に供給し、残りを輸出するか民間業者に売り渡すかする。筆者は、MET 傘下の 2 つの工場で MCSE からの原綿供給に関するインタビューの機会を持つことができた。しかし、数値的データの収集や詳細な議論は困難であったので、ここでは MCSE から MTE への原綿の供給に関する MTE 側の苦情を中心に記述していくこととする。

調査した 2 工場の工場長や技師たちは、MCSE によって供給された原綿の質についても量についていろいろな問題点を語った。量の問題については、1 つの工場の工場長が、MCSE からの 2000/01 年度の供給量は目標のたった 40% にすぎず、これが 2001/02 年度にはわずか 6.42% まで減ってしまった。工場の稼働率を低下させないために、民間から原綿を買わざるをえず、また外国から合成纖維と原綿を輸入している。もうひとつの工場の工場長は、供給量の不足こそ強調しなかったが、適切な稼働率を保つために輸入原料は不可欠であると述べた。また、両工場とも工場に隣接している地域から原綿を購入することが困難になっており、自ら出費してはるか遠くの MCSE の工場に原綿の買い付けに行かなければならぬとのことであった。

また、MCSE によって供給される原綿の質については、両方の工場長から多くの不満が聞かれた。その第 1 は纖維の長さについてである。ミャンマーでいわゆる長纖維綿(long staple cotton)といわれるものは国際的基準の 28 ミリメートルよりかなり短いので、工場で番手の高い糸を生産するのは非常に困難である。そこで 40 番手から 20 番手に落とそうとすると、必要な原綿の量が 2 倍になってしまう。第 2 は纖度(fineness)である。MCSE によって供給される原綿は未成熟な綿を含んでおり、それはあまりにも細すぎる。第 3 は纖維の問題である。短纖維の含有率は理想的には 6 パーセント未満であるが、MCSE から供給される原綿は 10 パーセント以上の短纖維を含んでいる。これでは纖度の高い糸を作るのは非常に困難である。第 4 はゴミである。本来ゴミの含有率は 3 パーセント未満であるべきなのであるが、MCSE からの原綿のごみ含有率は 8 パーセントに届く。それが 6 パーセント以上である場合、加工が難しくなる。第 5 は湿気である。原綿をもう一度工場で乾燥させなければならない。第 6 は地域によって異なる原綿の性質である。ワタの種類は同じであっても、生産地によって原綿の質が異なるので、番手のコントロールが難しい。

これらの問題を農民の努力だけで解決することは当然できない。この部分においては、市場経済化だけでなく、新しい種子の開発、適切な肥料および農薬の供給、適正な技術の普及など公共機関のコミットメントが必要とされるだろう。

第 7 節 世界市場とミャンマーの綿の貿易

国際市場での原綿価格は、1993 年以来最低の安値、前年比 30 パーセントの低下を記録した 2001 年 7 月の状況から回復し、2001 年 10 月にかけてわずかに上昇した。将来的にも続くであろうと予測される供給超過、および世界経済の減速が、2001/02 の安値の主な原因だった。したがって、近い将来価格上昇するという可能性は少ない(Table 9)¹¹。

Table 9. Estimated Average of
Annual World Market Price of Cotton

Year	US cents/lb
1997	79.13
1998	65.56
1999	53.10
2000	59.01
2001	48.12
2002	43.39

Source: FAO

Table 10 は、ミャンマーの綿輸出の 2 つの傾向を映し出している。輸出量は 1997/98 年から 1998/99 にかけて急激に上昇したが、1999/2000 年に半減、だが、2000/01 年に再び回復している。輸出の方向は上向きかもしれないが、これがそのまま続くかというとそのように予測することはできない。2000 年以降新しい紡績工場や職布工場が次々に設立されているので、これらの国内需要を満たすだけでも難しい事態になるであろう。Table 9 と比較して、Table 10 は、両者の価格が並行的に下落して入るが、ミャンマーの原綿価格が常に世界相場より安かったことを示している。だがこれは、ミャンマーの綿が世界市場において競争力があることを必ずしも意味しない。前節で述べたように、ミャンマー綿の品質が世界標準よりかなり低いので安くて当然ともいえるからである。それでも安い画質の悪い原綿への外国需要が継続するならば、ミャンマーの綿輸出を増加させる可能性を否定することはできない。しかし上述の国際綿市場の低迷はその輸出収入をもたらさないであろう。

MCSE の国内市場への販売価格は、公定外国為替相場を使用すれば、世界市場のそれより非常に高い。これに反して、現行の自由（闇）為替相場が適用される場合、国内価格は国際価格より低い。さらに MCSE の国内販売価格はミャンマーからの輸出価格よりも安い。しかし、Table 10 の両価格を比較してみればわかるように、その差は、国際市場価格を反映して、急速に狭くなっている。この傾向は上に言及されたようなしばらくは継続するだろう。そうならば、輸出してても国内でうつても収入はほとんど同じである。しかし、国内産原綿の質が、特に纖維の長さにおいて、国際市場におけるそれとはだいぶ異なるの

で、外国産原綿の輸入のための外貨を、競争力のある可能性のある国内産綿である程度獲得しておくのも一つの方法であろう。

原綿の国内価格と輸出価格差がほとんどないことは、MCSE をして、実綿の供出価格を上げることを困難にするであろう。しかし、もし供出価格があまりにも低かったら、農民はより有益な作物に密かに作目転換するか、あるいはやみルートで彼らの生産した実綿を売ることになるであろう。このような状況下で、有効な手段の一つは、ワタ作を自由化して、農民に国際競争力のある農作物を自由に作付けさせることである。これによって得た外貨で、供給過剰気味で価格が低迷している国際原綿市場から品質のよい綿を買って、紡績や職布産業の原料とすることであろう。

Table 10. Domestic Export and Domestic Sales of Cotton Product*

Year	Export				Domestic Sales					
	Quantity	Value (in Million)		Average Price US cents/lb	Quantity	Value Million Kyats	Kyats/lb	Average Price		US cents/lb Exchange Rates (1US\$=6.8kyats)
		MT	US\$	Kyats				US cents/lb	US cents/lb	
1994-95	285	0.162	0.80	25.81						
1995-96	60	0.097	0.53	73.40						
1996-97	405	0.402	2.40	45.08	6874	1043	68.89	1013	31.31	(220kyats)
1997-98	3312	3.842	23.89	52.67	5178	1106	96.97	1426	29.39	(330kyats)
1998-99	3722	3.366	21.23	41.06	5158	1086	95.59	1406	27.31	(350kyats)
1999-00	1899	1.476	9.12	35.29	7341	1930	119.36	1755	32.26	(370kyats)
2000-01	2127	1.643	10.71	35.07	6971	2059	134.10	1972	33.52	(400kyats)

*: Including Long-staple cotton, Wagyi and Linter.

Source: Myanma Cotton and Sericulture Enterprise, *Internal Documents* (1999-2000 & 2000-01).

All prices were calculated by the author.

むすび

ミャンマーの綿作に関する生産政策とそれが農民および国有企業に与えるインパクトに関して議論してきた。全体として、市場経済化という錦の御旗を振っているわりには、中央にも地方にも管理統制的指向が強く残っていて、中央指令型経済が依然として猛威をふるい、市場経済は非常に脆弱である。現在、ワタ作農民は生産物である実綿を国有企業に低く設定された供出価格で売ることを強いられており、より利益の上がる作物の自由な選択、市場や地域の特性に合わせた自主的なクロッピングパターンの設定等をすることはできない。

このような状況を鑑みると、2つのシナリオが、ミャンマーの綿業の将来に関して想定できるように思われる。ひとつは国家が従来どおりに、もしくはそれ以上に綿業に統制的に関わっていくことであり、もうひとつは自由化、民営化である。

前者のシナリオは、Table 2 から読み取れるようなトレンド、すなわち国家による供出制度の強化である。民間部門は数年前にまでは実綿を取扱うことができたが、必要な許可する時期が次第に遅くなり、2001 年以降民間業者に対する綿取引の許可は出なくなった。その間に新国有の紡績および織布工場が政府の計画の下で操業を開始しており、さらに新設が予定されているので、国有部門からの実綿および原綿需要は必然的に増加するだろう。そして国家の目標を満たすために、MCSE が国家の権力機関と協力して闇取引を取り締まり、国有部門に安価に実綿を売り渡すよう農民を指導あるいは強制することになるであろう。

しかしながら、嵩張って秘密裏に取引することが困難であるサトウキビと異なり、実綿や原綿の不法な取引を捕らえて、かつそれを根絶することは不可能であろう。安価に肥料や農薬を供給し、代金の前貸しをし、生産過程を指導あるいは監視し、違法なマーケティングを取り締まりながら、実綿供出政策を続けるのは、社会的および財政的負担が大きすぎるようと思われる。それでもなお国家による統制を続けようとするならば、農民の生産から供出、販売にかかる費用を考慮すべきであろう。さらに、Table 3 で示されるように、供出強制の浸透度は郡や県によって異なるので、これが地方の格差を助長することになる可能性も考えられる。

もうひとつのシナリオは民間部門の領域を拡張することである。民営化の第 1 の効果は農民の福祉の上昇であろう。民間業者は互いに競争してワタの競合作物の収入に見合うような実綿価格を提供するようになるだろう。すべての競合作物の価格が同時に低下することがないとするならば、ワタ作農民の収入は増加するであろう。例えばクリーニングされていない実綿の庭先価格は、直ちに 2,3 倍に増加するだろうし、そうでなければ、農民は自らの利益を最大限にするために自由に作目を変更するであろう。そして、実綿価格の増加は、綿の品質や生産性を改善するための最高のインセンティヴとなるだろう。さらに綿花の世界市場が供給過剰状態にあり、短期的には価格が低迷するという事実も考慮する必要がある。比較優位にある農作物を自由に栽培、流通、加工させて、それで稼いだ外貨で紡績および織布工場に必要な高品質の原綿を輸入すると言うのもひとつの手であろう。ここで重要なことは、今まで農業や農産物の国内流通にほとんどかかっていなかった税を、自由化の後は有効に捕捉しなければならない。

自由化といつても種子の改良、栽培方法の研究、普及事業等、国家の役割は決してなくなるわけではない。それでも国営事業による供出は、市場経済化の理念から言っても、緩められるか廃止されるべきであろう。

【注】

- ¹ 前者は綿花栽培の普及とその買い上げおよび挑発した実綿¹の綿縞を行い、後者は紡織と染色を分担している。
- ² それ以前は農業省傘下のミャンマー農業公社が普及を、第一工業省傘下のミャンマー織物公社が買い付けを担当していた。
- ³ 1 チャットは 2002 年 1 月の実勢レートで約 0.2 円、公定レートでは 20 円。
- ⁴ “Essential Supplies and Service Act” および “Protection of Commodities Related with the Public Act” が適用される。
- ⁵ 国家平和開発評議会(State Peace and Development Council) が現在のミャンマー連邦を支配している軍事政権の正式名称であるが、これが各州管区、県、郡、町村レベルでも、各レベルの最高権力機関として組織されている。
- ⁶ 高橋昭雄『現代ミャンマーの農村経済—移行経済下の農民と非農民』(東京大学出版会 2000 年) 46-47 ページ。
- ⁷ 同上書 20 ページ。
- ⁸ 高橋昭雄「上ビルマ・チャウセー地方の河川灌漑と農業」(『アジア経済』第 34 卷第 12 号 1993 年 12 月) 33-35 ページ。
- ⁹ 同「ミャンマーの国営製糖業と耕作農民」(『東洋文化』第 82 号 2002 年 3 月) 143-144 ページ。
- ¹⁰ 高橋『現代ミャンマーの……』 107 ページ。
- ¹¹ <http://www.fao.org/WAICENT/FAOINFO/ECONOMIC/ESC/esce/cmr/cmnotes/CMRcote.htm>, 12 March, 2002.

【参考文献】

注記参照のこと。